

震災に立ち向かった宮城の部活動

— 宮城県高体連研究部安全専門班

東日本大震災記録集を基にした5年間の考察 —

宮城県仙台西高等学校

畑 山 浩 志

1 はじめに

東日本大震災。あの日から早くも5年の月日が経過しようとしています。そのような中、まずは、被災地に数々のご支援を賜りましたこと、心から感謝申し上げます。私どもはこの未曾有の惨事に、宮城県のスポーツを愛する若き力がどのように立ち向かい、立ち直っていったのか。そして今、復興から新たな未来への発展を遂げるためにも、あの日からの足取りを、50周年大会の本日、皆様にお伝えすることがご恩返しの一環と信じております。安全専門班の趣旨としては逸脱する場面があるかもしれませんが、お許しいただければ幸いです。

2 調査研究の経過

(1) 1年目（平成24年度）

- ・宮城県高体連の各専門部に第1回アンケート調査を行う。（主に震災の被害概要について）

(2) 2年目（平成25年度）

- ・沿岸部の被災高校に調査対象を絞り、部活動を立て直すまでの様子について第2回アンケート調査をする。（顧問対象）
- ・各専門部に依頼し、被災した生徒を対象として概要調査を行う。（作文として集約）
- ・アンケート調査・生徒の文集の編集→「東日本大震災の記録集」発行

(3) 3年目（平成26年度）

- ・各専門部へ活動報告書の依頼 記録集 P39～P96
- ・第62回北信越インターハイで上位入賞した生徒及び顧問を追跡し、第3回アンケート調査を行う。

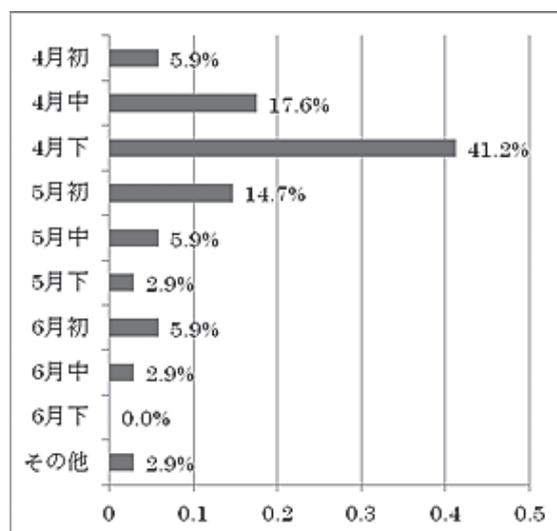
3 調査結果

(1) 第1回 アンケート調査について

- ・調査対象：各専門部
- ・調査内容：東日本大震災の被害状況について
自由記述で報告依頼
記録集 P31～P32

〈考察〉

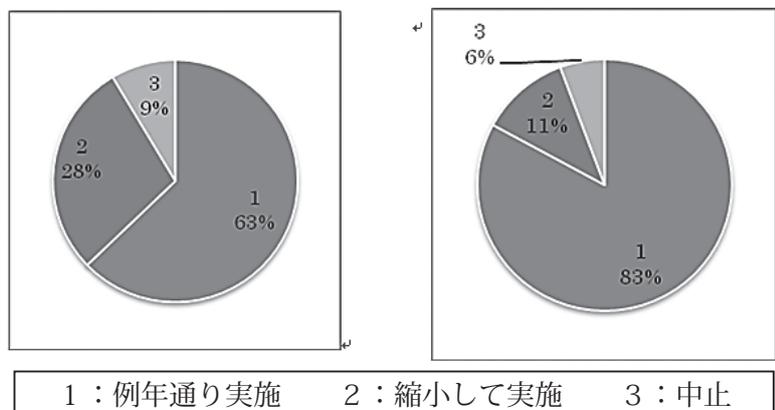
グラフ1は専門部活動の再開時期である。ほとんどの専門部は早ければ4月初旬、遅くても震災から3ヶ月後の6月中旬には活動を再開している。しかし、高校総体の開催状況においては、ヨット専門部は沿岸部の甚大な被害であり開催できず、野球専門部は春季リーグが開催できないなど、各地で開催制限を余儀なくされた。



グラフ1：専門部の活動再開時期について

グラフ2は各種大会の開催状況である。(記録集P 32) 各種大会においても新人大会、国体予選、選手権大会予選等においても中止せざるを得なかった競技もあった。しかし、多くの専門部は全国各地や上部団体からの支援もあり、平成23年度は例年より縮小して活動したが、平成24年度になると「規模を縮小した」という回答が前年度の半数となり、現在は各校の部活動もほぼ平常に戻ってきている。

グラフ2：各種大会開催状況（左：高総体・右：新人戦）



(2) 第2回アンケート調査について

① 顧問アンケート

- ・調査対象：津波被災地高校運動部顧問
- ・調査内容：資料1（当日配布）

② 生徒作文 依頼

- ・調査対象：津波被災地高校運動部生徒
- ・調査内容：資料2（当日配布）

返信 180通 その一部 40通 記録集に掲載
調査結果 記録集 P33～P38

第三回アンケート

第62回北信越インターハイにおいて、宮城県の選手たちは上位に入賞し、好成績を残した。そこで我々は、以下のような仮説を立て、沿岸部の被害を受けた部活動の専門部を中心に、各校にアンケート調査を行うことで検証することとした。

〈仮説〉

東日本大震災以降、運動部において危機管理意識の高まりや、避難所での活動から郷土愛がはぐくまれ、それらが選手・教員において怪我の減少、モチベーションの向上につながったのではないかと考えられる。

〈考察〉

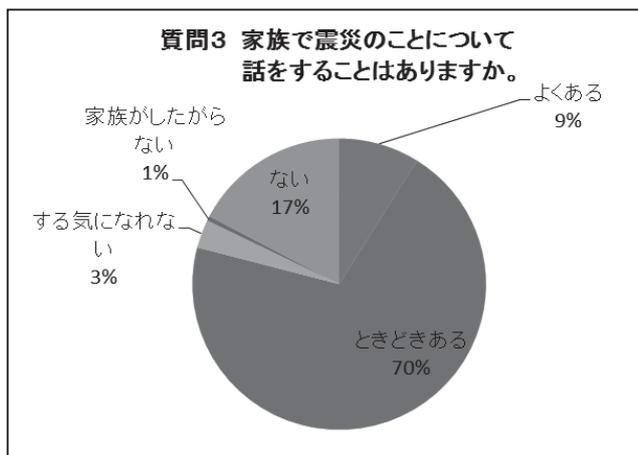
グラフ3「家族で震災のことについて話をすることはありますか」という質問に対する回答では、「よくある」という回答が9%、「ときどきある」という回答が70%となった。また、グラフ4「家族で災害対策について話し合いをすることがありますか」という質問に対する回答では「よくある」「ときどきある」という回答を合わせると8割弱となった。これらの結果から震災以降も当時の状況や対策について話し合う場面がある。つまり、日常生活において折に触れて危機管理意識を高める話し合いを行っているといえる。これは震災以前にはほとんど見られなかったことであり、部活動の顧問や選手の立場からすれば「折に触れて非常事態を想定し、予測し、対策を立てる」意識が高まっていると考えられる。

また、「震災前後での生徒の意欲の変化」に対するアンケートの回答では、「あまり変わらない」と

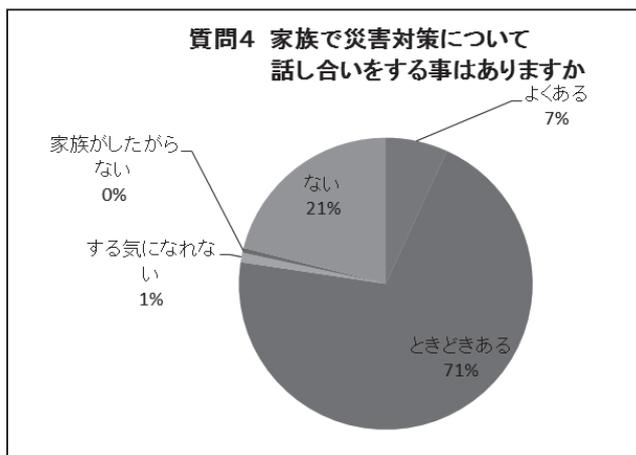
いう意見が最も多く、43%となった。震災以降「日常の部活動」を心のよりどころとし、「震災の非日常」を部活動に参加することで心の安定を図り、乗り越えていた生徒が多いということではないかと推察される。また、「とても向上した」「やや向上した」という回答が2割以上となったことについて着目すべきと考える。これは、震災以降、避難所として学校、体育館が機能したことで、今までは閉鎖的ともいえた部活動の場に「地域目」が加わったことが大きな要因の一つではないだろうか。誰かに認められ、声をかけられることに喜びを感じる子供たちは多い。今までは顧問や学校の先生、コーチだけのコミュニケーションが、一気に地域住民に広がったのである。不備不足だらけの状況でも、なおたくましく部活動に汗を流す姿に、地域も住民も力づけられたことだろう。また自分の子供や孫のような生徒たちに、温かい言葉、声援を送ったはずである。それらが育むのは郷土愛ではないのだろうか。

今までは「チームのために」「学校のために」「自分のために」「教えてくれた人たちのために」という思いで、努力を重ねてきた生徒たちが、「自分は地域の人たちの心の支えになっているのだ」と確信し、大きな力となって試合で発揮されたのではないかと推察される。さらに、震災前後を比較すると、地元や支援団体からの応援も震災後の方が格段に多くなっており、メディアでも頻繁に取材されることから生徒たちの頑張りをアピールする機会が多くなった。それは子供たちのモチベーション向上に一役、二役買っているのではないかと考えられる。震災以降の過酷な状況の中、子供たちはそれでもなお、精神面での健康を保っていることができたのは、このような多くの人々の力があつたからである。

グラフ3



グラフ4



(3) 第3回アンケート調査について

調査理由

① 北信越インターハイについて

表1より、平成24年度の結果では8位以上の入賞者数をカウントすると、入賞数は63となっている。これは平成2年度の宮城県でインターハイが開催された時以来の好成績である。直近5カ年における入賞者数平均は45.8となっており、宮城インターハイ以降の平均も51.5である。入賞数60を超えたインターハイは、平成16年における島根インターハイにおいて入賞者数が61であるが、震災以降練習に制限がある中、決して万全な状況での出場とはならなかったにもかかわらず、好成績を修めたのにはどのような背景があつたのか調査した。

個人競技と団体競技で比較した場合、体育館での練習を必要とする団体競技の成績はそれほど伸びていない。体育館が地域の避難所として機能していたため、施設使用の必要がある競技において練習内容に制限があつたことが背景としてあげられる。しかし、個人競技や練習場所に左右されない競技は、成績が伸びている。そこで、好成績を残した部活動に、要因調査を行った。

表1 平成における全国高等学校総合体育大会入賞者数の推移（冬季種目除く）

年度	主催地	団/個	優勝	準優勝	3位	4位	5位	6位	7位	8位	計	合計	国体順位
平成2年	宮城	団体	7	1	6	2	3	2	2	3	26	65	23
		個人	2	5	9	3	11	3	4	2	39		
平成16年	島根	団体	7	3	1	1	5	1	1	2	21	61	8
		個人	7	5	5	3	9	5	2	4	40		
平成24年	北信越	団体	1	4	1	1	7	4			18	63	25
		個人	6	5	7	3	10	5	3	6	45		

② 顧問アンケート

- ・調査対象：津波被災地高校運動部顧問
- ・調査内容：資料3（当日配布）

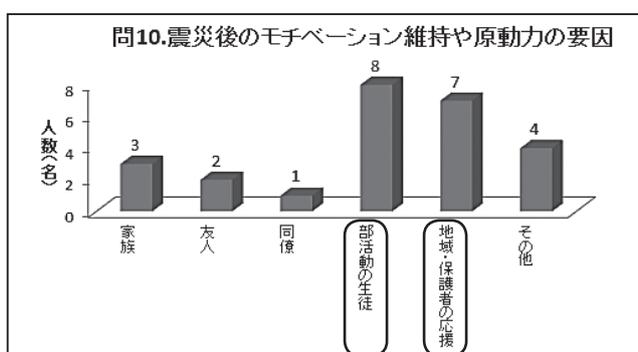
③ 生徒作文 依頼

- ・調査対象：津波被災地高校運動部生徒
- ・調査内容：資料4（当日配布）

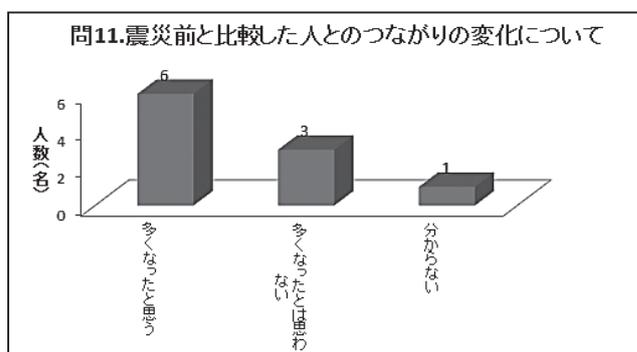
第3回アンケートの考察

「震災後のモチベーション維持」の要因について調査した結果、「部活動の生徒」が最も多く、次いで、「地域・保護者の応援」が多い結果となった。前述のように震災以降、地域住民が学校に、部活動に明るいニュースと心の支えを求め、それに子供たちが必死に答えようとした結果であると言える。また、グラフ5「震災前と比較した人とのつながりの変化」については、「多くなった」との回答が最も多くなった。また、グラフ6「震災以降の各種団体とのつながりについて」は、「保護者・PTA」という回答が最も多い結果となった。他にも地域住民や外部団体、他校や企業（スポーツ用品メーカーなど）という回答もあった。講習会や場所や練習相手を求めている遠征等、人とのつながりが多くなり、それにつれて多様な情報が入ってくる環境を形成する。スポーツ用品メーカー等の支援もあり、有名選手が訪問してくれることで、技術だけではなく、モチベーション向上にもつながった。つまり、人とのつながり、そしてそれに育まれた健全な精神。それこそがインターハイで好成績を収めた部活動における原動力となったのではないかと考えられる。

グラフ5



グラフ6



4 H25・H26の現状

しかしながら、平成25年のインターハイでは、近年5か年、そして宮城インターハイ以降の平均からしても格段に低い41の入賞者数となった。震災から2年、3年が経過し避難所から仮設住宅、新興住宅に移動する地域住民の増加から、学校から地域の目が離れ、震災時は「何かしなければ」と使命感に燃えていた子供たちが、震災前の普段の生活が戻ってきたことで、一時的な「燃え尽き症候群」の状態になったのではないかとということと考えられる。張りつめていた気持ちが緩み、精神面での疲弊が意欲を萎えさせる。また、震災をともにしたチームメイトの卒業や引退。新しく入部してきた部員との、連帯感に対するギャップなどが背景にある。

5 終わりに

3年間のアンケート調査や追跡調査から安全専門班では震災が生徒に何をもたらしたのか考えると、それは、「予測する力」ではないか。想定外を意識し、様々な角度から「次に何が起こるのか」を意識することで、危機管理意識が高まったと思われる。それは、非常時だけではなく、スポーツをする上で自らの安全を守るという点では非常に大切なことなのではないだろうか。スポーツをする上で大切なことはたくさんあるが、その根幹にあるのは安全に競技をする技術であり、それを教えるのが学校であり、部活動の現場なのではないかと考えるものである。そのためにも、我々は生徒に危険を予測し、非常時を想定する力を育てることが大きな課題であると考えられる。

また、今までの調査で明らかな根拠や顕著な因果関係や相関は認められなかったが、生徒の作文や多くの活動から分かったといえることは、スポーツ教育の役割は大きく、多くの課題を残しているということである。

一つは目の前にある問題は被災地だけの問題や過去の出来事で済ませられることではないということである。

現代社会における子どもの教育には欠かせない心の治療や豊かな心の育成は不可欠といえ、スポーツを通して勝利を掴むために必要な危機管理意識や想定外をなくすこと、競い合うこと（自己の向上）の大切さを伝え、競い争う（つぶし合い）ことではないということをお教えていく必要がある。

もう一つは、震災から学んだ、命を守り、命を救い、命を繋いだ要因は下の要因だった。

命を守る5つの心 信じる心・頑張る心・諦めない心・負けない心・流されない心

命を救う5つの力 観察力・洞察力・判断力・決断力・行動力

命を繋ぐ3つの心 思いやる心、助け合う心、支え合う心

そして、その心や力を日常の生活で身につけるとすれば、スポーツ教育から生まれるのではないか。

勝利を導く5つの心 信じる心・頑張る心・諦めない心・負けない心・流されない心

勝利を掴む5つの力 観察力・洞察力・判断力・決断力・行動力

チームを作る3つの心 思いやる心、助け合う心、支え合う心

勝利を得るための指導が、子どもの命を守り、命を繋ぐことにつながるとしたら、指導者の役割は多大なことになるのではないか。スポーツ教育こそ未来を切り開く原動力になるのではないかとと思われる。

今後その根拠を探るための研究を続けていきたい

被災地からのラストメッセージ（平和）

被災地を歩いているとまるで戦場を歩いているように錯覚する。誰を、何を相手に戦っているのだろうか。分かったことは自然と戦い敗れたと言うことでではないか。

戦場に見えた地は紛れもなく故郷だった。あの時、絶望という言葉一つで伝えられないほどの光景を目の当たりにし、その中で人々は寄り添い合い、助け合い生きる勇気を得たはずだった。しかし、日常を取り戻した今は、未だに人は人を傷つけることをやめない。命を奪うことをやめようとしめない。ハラスメント、いじめ、虐待、暴力、罪、ネット、殺人、戦争、テロ・・・と身近なところから広範囲なところまで争いは尽きない。

人類の敵は人でも国でもなく、自然だったはずである。

競い合うスポーツを通して絆を深め、人と人が手に手を取り合い、国を超え、人種を超え、本当の絆（平和）を持つことが必要ではないだろうか。この絆こそ未来に起こりうる自然災害という敵に立ち向かう準備と言えるのではないだろうか。そして、自然災害から身を守り人類が生き続けることができるのではないだろうか。

今だから伝えられること

～ We can defend ourselves from dangers through sports ～

私たちはスポーツを通して危険から身を守ることができる

宮城県高体連研究部安全専門班では、平成 23 年 3 月 11 日のあの日、あの時、そして今に至るまでの道のりを、この「3.11 東日本大震災の記録」に集約しました。これからの指導にご活用いただければ幸いです。